



ぶかぶか漂う
第21回

タイに引っ越し?!



私は今、タイはバンコクの隔離ホテルでこの原稿を書いています。夫が赴任になりまして、決断と準備の怒涛の三ヶ月を経て今ここにいます。

一番悩んだのは長男。考え得るあらゆる選択肢を調べた上で、まずは長男だけに話をしました。この春、高校生になる長男が、タイに行くのか、日本に残るのか。正解はないだけに自分でよく考えて決めもらいたかったのです。

タイに行くなら長男はインター・ショナルスクールに編入することになります。学齢が上ががるほど編入は厳しくなり、英語が得意じゃない長男を受け入れてくれる学校が果たしてあるのか、インター・ネットで調べてみました。「高校生は日本に残った方がいい」という内容の記事を何度も目にしながら、それでもなんとか受け入れてくれたそうないんターネットをピックアップしました。

一方、日本に残ることについても考

小か、そんなことは関係ない、この年代のやり場のない心残り。

長男と話した当時は一月末に最後の大会が予定されていて、本人は楽しみにしていました。だからその大会を精一杯頑張って、それからもう一度話合うことにしました。

それが正月明けの緊急事態宣言でその大会さえも中止の連絡。彼にとっては期待と落胆の繰り返しの一ヶ月でした。今の仲間と高校バレーボールを続けるというならそれもよし。彼の判断を待ちました。

その頃になつてはじめて、長女と次男にも話をしました。二人は二つ返事で「行く、行く！」驚きのノリの軽さ。小六の長女は曲がりなりにも中学受験をするつもりでいましたが、しかももつ直前。なにかしら反発があると覚悟していましたが、そんなことは全くなく。

お気楽妹弟の様子が関係しているのか、タイで挑戦してみようと思った

えました。長男だけが残り、祖父母の家から通学することも可能です。もしくは子供たち全員が日本に残りたいなら、夫を単身赴任で送り出しつもりでした。

長男が通っているのは大学付属の高一貫校ですので、おそらく彼は日本に残った方が楽でリスクも少なくて、タイでインター校に通うなら相手の努力が必要となります。

この選択肢を前に、本人は頭を抱えてうなりました。思春期ですし、自分の思いを説明するわけではないですが、どうやら本人の悩みどころは、私たちの心配とはまったく違うところ。進路や勉強のことではなく、ただ一つ。部活でした。

そうか、部活か。彼は中学からバレーボールを始めました。背が高いわけでもなく、中二までは試合に出られませんでした。中三になって、やつとという時、コロナで全ての大会が中止に。上手か下手か、強豪か弱

のか。何がきっかけか謎ですが、長男はある日、一緒に行くことになつていきました。「え、俺は最初から行くつもりだったよ」と、少し前までのどんよりムードから一転、すっきりした顔で荷造りをしていました。

そんなわけで家族全員、タイに行

くことに。目の前に山が現れた時、私は登つてみようとしてきました。

流れに身を任せた方が自然だと感じたし、分け入ってみると楽しいことがあるかも。子供たちが目の前の山を避けずに登つてみようとしたことは、ちょっと嬉しかったです。

(写真はタイ隔離ホテル到着時の様子とホテル内で受けたPCR検査。)

文・写真
小宮華寿子
二男一女の母で
編集者、「プラ」と
ジルの手しごと
(メイツ出版)著者。世界の雑貨と
ワークショップの店「メルカジニョ」
(<https://mercadinho.net>)代表。

イラスト・
デザイン
寺沼麻美
切り絵作家、時々
デザイナー、「ゆ
らゆらゆれる北歐風手作りモビ
ール」(ネコ・パブリッシング)を監修。